

僕にはそんな勇氣はない

六月十二日から六月十四日

僕にはそんな勇氣はない

十一日（水）の朝のことがあってから、僕は彼女に手紙を渡す事を決心した。

朝は、通勤通学ラッシュで、人ゴミ多く、その機会がない。

まわりに人がいすぎる。

と言っても、僕は、帰りは、クラブ活動で、いつも遅く、先週、水曜日（十一日）の後、木金土と、全く、チャンスはなかった。

日曜日（十七日）になり、じっくりと、一日かけて、僕は、落ち着いて、手紙をもう一度、書き直した。

長いこと、制服のうちポケットに入ってたままで、手紙は、クシャクシャになってしまっていた。また、読んで見ると、自分が何を言いたいのかわからん様で、混乱しているのが、まる見え。「ああ、渡さんで良かった。」と思った。

昼飯で下に降りて、居間のテーブルに座った時、何気なしに、お母ちゃんに聞いて見た。

「ねえ、お母ちゃん、ラブレターもらったことある？」
「変なこと聞くなあ、この子は。」